

獲得した言語で書くこと

——ムールード・フェラウン『貧者の息子』の一読解——

【要 旨】

石 浜 裕 子

獲得した言語で書くこと
——ムールード・フェラウン『貧者の息子』の一読解——

【要旨】

本論文は、1913 年生まれ（-1962）アルジェリア（マグレブ地域）、カビリア人作家ムールード・フェラウンの最初の小説作品『貧者の息子』 *Le Fils du pauvre*（Le Seuil, 1954）の、（主人公の）エクリチュール（獲得）に焦点を合わせて読解を試みるものである。本作品は自伝的小説である。フェラウンはフランス植民地時代のアルジェリアにおいて、小学校の教師を務めながら小説を執筆した。その使用言語はフランス語である（フランス語マグレブ文学）。

第 I 章 ポストコロニアル文学としてのフランス語マグレブ文学

フェラウンは、フランス語マグレブ文学の最初期（第一世代、1950 年～）の作家の一人である。この第一世代以降、フランス語マグレブ文学は世代を重ねて現在にいたるまで多くの作家を輩出し、優れた作品が発表されている。本章では、その新しい文学潮流の文学史的俯瞰よりも先に、フェラウンが何によって書き始めたかを探った。

そのために、中国の文化研究者レイ・チョウが、著書『プリミティヴへの情熱』（1995）で紹介した、「魯迅が、自分が文学に関わったいきさつを説明した話」の助けを借りることにした。魯迅は日本の（現）東北大学医学部に留学しているとき、講義の合間に偶然目にするようになった、同胞が日本人に処刑される直前の映像を見て「衝撃」を受けた。その後間もなく、医学の勉強を止めた魯迅は、文筆によって中国（の人々）を変えることを決心する。魯迅の受けた衝撃の意味は以下のようなものである。まず、視覚と権力の関係の多重構造。それは、ただ単にスクリーンに映し出されるイメージを観客が見ているというだけでなく、処刑される中国人を取り囲んで呆然と見る同胞、その「見る/見られる」関係を見る自分と日本人級友、さらに映像を見る自分自身や居合わせた人たちを観察する作家自身、という複雑なものである。そのなかで、魯迅は近代世界で中国人であることの意味を、映像を見ることで発見する。映像は、ここに示した複雑な構造とその意味を一瞬で示すインパクトを持っている。

チョウが言うように、この構造は近代（植民地期から脱植民地期）において世界の各地で見ることができる。マグレブ、アルジェリアにもこれは存在する。ムールード・フェラウンは、自ら、アルベール・カミュがジャーナリストであった時代に、自分の故郷カビリアについて新聞に発表したルポルタージュ「カビリアの悲惨」（1939）に衝撃を受けた。それは映画ではなかったが、魯迅の経験における、視覚と権力の関係の多重構造を反復している。映画の出現はテクノロジーの発達を待たねばならなかったが、近代はすでに、あらゆる領域で視覚の優位が確立していた。民族学/民族誌、文化人類学といったディシプリンの方法はその例であり、ジャーナリズムにおける取材の手法も例外ではなかった。チョウの関心の中心は映像であり、映像は直接的で衝撃的だが、その意味は曖昧である。いっぽう、テキストはよりはっきりと意味を伝えるものである。フェラウンは、カビリア人であることの意味を、「カビリアの悲惨」を読むことで突きつけられたのである。

フェラウン自身は、カミュはジャーナリストとして真摯な取材と報告を行ったと評価し

つつも、結局、カビリア人について知らないので十分に書くことができないのだとして、自分自身は「カビリアの魂」を翻訳し証言する役割を負うのだと考える。

フェラウンの書こうとしたものを考える場合、チョウの言う文化間の翻訳の概念が重要である。チョウの言う文化間の翻訳とは、従来からある言語間の移しかえだけでなく、表現のタイプ間（テキスト表現から映画）の移動、見られた/書かれた（表現された）側が書きなおす（表現しなおす）行為等々が含まれる。フェラウンが「カビリアの魂」を書こうとしたことは、自分の民族誌、すなわち自民族誌を書くことだが、それは、自らが言うように翻訳する行為である。その際、重要なのは、見られた側にはすでに対象であったことの記憶があり、自ら書こうとする始まりには必ずその記憶が残っているというものである。このことが、『貧者の息子』の本編最初の四つの段落にはっきりと記されている。『貧者の息子』は、自らがどう見られているかを知っていることを宣言しながら始まる小説である。

フランス語マグレブ文学は、フランス人ではなく、アルジェリアなどマグレブ諸地域の原住民によって書かれた文学だが、それに先だって、現地生まれのフランス人（入植者の次世代以降の人たち）による文学活動があった。十九世紀末期からのアルジェリアニスム、さらにアルジェ派の作家たちの活動があるが、いずれも、本国とは別にアルジェリアで生まれた文学活動である。アルジェ派はフェラウンら第一世代の作家と直接関わりがある。こういった関わりに影響や恩恵を受けつつ、彼らには書けない文学を目指し、新しい文学の書き方を創出しようとしたのがフェラウンであった。

第Ⅱ章 ムールード・フェラウンと『貧者の息子』

ムールード・フェラウンは、1913年フランスのアルジェリアに生まれた（カミュと同年）。カビリアの小村ティジ・ヒベル出身のカビリア人である。地元の小学校を終えた後、ティジ・ウズの中等学校等を経て、アルジェの師範学校に進学し、小学校の教師となる。1939年から『貧者の息子』の執筆を始め、以降、教師をしながら作品を発表。『貧者の息子』がアルジェ市の文学大賞を受けるなど、評価された。1962年、フランスから独立を目前にして、工作中だったフェラウンは同僚とともにフランス秘密警察の武装部隊に射殺された。『貧者の息子』以外には小説の完成作は二作。他に、エッセイ、翻訳、雑誌寄稿文などがある。

『貧者の息子』は、フェラウンが初めて書いた小説である。1939年から48年までをかけて書かれた。最初、フランス、ル・ピュイにあるカイエ・デュ・ヌーベル・ユマニスムという出版社から自費で出版。1954年には、師範学校以来の友人であるエマニュエル・ロブレス（作家、編集者）の取り計らいで、改めて、パリのスイユ社から出版された。これは、初版に大幅に手を加えたものであるが、大変普及した版である。ほかに、作家死後に時間を置いて二つの版が出ている。本論では、他はきわめて入手困難であるという事情もあって、スイユ版を用い、初版からスイユ版に変える際に削除した部分（作家死後出版の書籍『記念日』所収）も含めて考察を行った。

『貧者の息子』は、二部構成（前半【家族】と後半【長男】）をとっており、語りの人称は、【家族】が一人称、【長男】が三人称である。それぞれ、本編が始まる前に前置きの文が置かれている。【家族】の前置きでは、当の作品が世に出ることになった事情が書

かれ、【長男】では、語りが三人称になる理由が書かれる。二つの前書きによれば、ある学校の教室から置き忘れられたノートが発見され、そこには途中で止めた小説（本作品の【家族】の部分）と、ノートの持ち主（主人公、フルル・メンラッド）の日記が書かれていた。発見者は、その小説を発表することにする。物語が途中で止まっていたので、フルル・メンラッドをよく知る人物が【家族】の続き【長男】を書くことになった。ノートの発見者と二つの前書きの書き手、【長男】の語り手は同一人物であるかに思われるが、前書きの書きぶりから判断するに、そこには複数の人物が関わっている可能性があり、断定はできない。また、ノートには日記の部分があったので、最終的に発表された小説は日記をもとに書き直された可能性がある。こういった事情で、この作品は複数の語りから成っていると考えられる。各部は番号を付した断片の記述が並べられる。おおまかには、主人公の生い立ちの時間軸に沿って物語が進んでいくが、断片はトピック別の内容である。

【家族】は以下。1.前書き（ここは前書きに番号あり、）2.主人公が誕生した村ティジ・ヒベルの紹介、3.メンラッド家の人々、4.フルル・メンラッドの誕生、5.親族（カビリア）の男たち、6.親族（カビリア）の女たち、7.学校へ行く、8.主人公の祖母タサディット（事実上の家長）の死と大家族の崩壊、9.伯父ルニス（父の兄）の家の人たち、10.ナナ（母の妹）が赤ん坊を死産して亡くなる、11.ハルティ（ナナの姉）が発狂し行方不明になる。

【長男】は以下。番号のない前書き、1.弟ダダールの誕生と父の病気、2.父のフランスへの出稼ぎと、フルルの初等教育終了、3.フルルが勉学の継続を決め、その時父負傷の報、4.父は回復して帰国し、フルルは奨学金を得て進学することになる、5.進学のためフルルは家を離れ、ティジ・ウズの町に住む、6.プロテスタントの修道院に寄宿しコレージュでの勉学に励む、7.コレージュを終了し、師範学校の入試に臨む。

『記念日』所収の続きは以下。表題『フルル・メンラッド』：【ブザレア】アルジェのブザレアにある師範学校に合格し、三年間の勉学に打ち込んで教師となる。故郷のカビリアの小さな村に赴任する。【戦争】1.故郷の小さな村で教えているときに戦争が起こる、2.フランスがドイツに敗北する、3.カビリアの過酷な窮乏ぶりが語られる、4.戦争が終了する。そのあとエピローグ。戦争終結後、教師として己の職務を果たして生きていこうという決意が控えめに述べられる。

『貧者の息子』の受容、評価：アルジェ市文学大賞を受賞するなど、成功を収めた作品である。また、アルジェリアでフランス語の教科書に採用されたこともあってよく知られたが、文学作品としては、長く、リニアで読みやすい民族誌的作品という評価にとどまっていた。2000年代に入ってから、物語の複雑な構造や、語りの特徴に注目した詳細な読みによって、評価のしなおしが試みられた。

第三章 書かれたカビリア、読まれるカビリア

カビリア人がマグレブ地域に来たのはアラブよりも早かったが、その来歴がはっきりしないこと、カビリア語では書記システムがほとんど用いられないことから、カビリアは自ら書かず、もっぱら書かれる存在であった。エキリチュールがほとんど不在のこの空間では、わずかな書き物は奇妙な手ざわりとして存在する。文字や本、読むこと/書くことそのものが、人の理解の外にあるような世界である。

カミュ「カビリアの悲惨」、ブルデュー『アルジェリアの社会学』のカビリアについて

の記述は、『貧者の息子』とどう関係づけられるだろうか。「カビリアの悲惨」は第Ⅰ章で見たように、フェラウンに自らペンを取らせるきっかけとなったテキストである。カミュはカビリアにおもむいて取材し、簡潔で力強い筆致でカビリアの悲惨の^{タブロー}画を描き出したが、カビリアをあらかじめ「悲惨」としてのみ示し、カビリア人の生活を深く知ることがなかった。いっぽう、ブルデューは社会学者のフィールドワークでカビリアの村や民家にまで立ち入って調査したが、それはカビリアの村や暮らしの外形を写し取ったにすぎなかった。フェラウンのテキストは、カミュの「カビリアの悲惨」への応答のように書かれる。カミュが悲惨と決めつけたカビリアの暮らしぶりには、人が生きるには条件の厳しい土地に根ざした知恵や工夫があり、それは都市部の生活者にはわかりにくいものである。フェラウンはそれを書こうとした。また、ブルデューのテキストは『貧者の息子』を補足するものとして読むことができる。この小説は内にいる者によって書かれているので、外から見た形は示されていない。『貧者の息子』の描くカビリアの暮らしは、ブルデューが書き取った外形のなかで日々営まれている、と読むことができる。

いっぽう、『貧者の息子』は、主人公がエクリチュールを獲得していく物語でもある。物語の後半では、出稼ぎによる、父のフランスへの往還と、長男である主人公のエクリチュール獲得への努力が縊りあわされるように語られる。代書人が書くフランス語によってしか父と通じることができないフルル・メンラッドは、まず、手紙の書き方を獲得する。このことによって、エクリチュールの獲得は、様々な書記の形式を獲得していくことができることがわかる。カビリアという空間では、多くの人が読むことも書くこともできない手紙は発信人から受信人にいたるまでにたくさんの介在がありすぎるために、メッセージを届けるものでありながら、その受信を遠ざけるものにもなる。

それから、父の彼の地での事故による負傷と入院治療という出来事によって、フルルはより読みにくい多様なエクリチュールに接し、それを読むことを強いられる。診断書、裁判記録、父の身体に残された外科手術の傷跡である。カビリア人にとっての、ことばの理解できないディストピア（宗主国）での怪我と手術の意味を読み解くために、ここでは『流刑地にて』（カフカ）を用いた。外科手術は、『流刑地にて』において囚人の身体に罪と罰を同時に刻み込み、死に至らせる処刑機械のように、父の身体に文字を刻みつけたのだと読める。

主人公のエクリチュール獲得は初等教育が終了して免状をもらうまでは、無条件に喜ばしいことと考えられている。それは出稼ぎに行った家族と手紙を交換できる能力と等価である。しかし、主人公はそこで止めることをせず、さらなる教育の機会を求めることになる。中等教育以上は村を離れなければ受けられない。エクリチュールのより高い能力を獲得しようとすることは、故郷と主人公の間により遠い距離ができることである。

第Ⅳ章 生きること、とりわけ語ること

主人公のエクリチュール獲得は大変困難なものだったが、最終的には学校の教科書で習ったテキストや、試験で出題される課題の作文とは別のエクリチュールに主人公/作家は挑むことになる。それこそが、『貧者の息子』である。

作家が自ら語ったように、書こうとするのは自民族誌/自伝である。それは、書くことの

できないことばで営まれるカピリア人の生活を、書くことのできる言語に翻訳して示すことである。カピリアでは、男と女が分担領有する空間は異なり、そこでは自ずと使われることばも異なる。

そこで、物語のなかから「男たちのことば」が描かれるシーン、「女たちのことば」が描かれるシーン、両者ともに、共同体まるごとで当たる行事のシーン（これについては、『カピリアの日々』より）を読んでみた。民衆文化のありようを研究し、人々が日々どのような戦略をもって様々な実践を行うかを考察した、ミシェル・ド・セルトーの研究成果を読解に生かした。

男たちのことばの力が発揮されるのは、二つの家族間での喧嘩のシーンである。きっかけはささいなことだが、両家族に多くの怪我人が出て村の重大事件となった喧嘩は、共同体が慣わしとした方法で解決される。それは、双方の家を村長始め村のお偉方、マラブー（宗教者）が訪れ、定められた方法によって行うもので、挨拶・口上の交換、調停者たちへの饗応で構成される。さらには調停者たちへの心づけをとまう。これは、すべて男たちで執り行なわれる。最期は喧嘩が終了したことを示すために聖なる本（コーラン）にふれて宣誓して終了する。主人公の嘘で大事になった喧嘩の華々しさを始め、調停までの一族の男たちの動き、もったいぶった調停の進め方が挨拶の応酬にいたるまで細かく描かれ、ひとつのセレモニーにまで完成された調停の様子がよくわかる。こういった公的な行為につきまとう表の事情とその裏の本音を、語り手は冷静に観察して記している。このような具

体的な事件を詳述しつつ、カピリアの男のあるべき^{イメージ}像や、彼らがもつ価値観が個別の人物のふるまいに生き生きと描かれている。

女たちのことばは、主人公の叔母姉妹への愛着に託して描かれる。カピリアの女はみな日々の暮らしに必要な道具類や布などを自分たちの手で作った。叔母の姉妹はいずれもフルルの母の妹で、ハルティ（おばちゃん）とナナ（ねえちゃん）と呼ばれる。ナナは手仕事に天分をもち、陶器にしる織物にしる見事な腕前である。いっぽうハルティは物語の名人でハルティの物語が主人公を叔母たちの家に引きつける。主人公がこの女性たちといっしょに過ごすシーンは手仕事が行われると同時に物語が語られる。ここでは、生（活）をつなぐ手仕事と、心を養う物語が緋い合わされ、それぞれの担い手ナナとハルティも二人で一人のように描かれる。ハルティのお話にこそ、自分の想像力の源泉があったことをフルルは認め、両者を子ども時代の終わりに失ったことを痛みとともに想起する。男たちの世界と異なり、見えにくい女たちの世界で使われることばへの深い思いが示される。

『カピリアの日々』に書かれた、ティムシュレットという祭・行事は、共同体で牛を何頭か購入し、成員全員が分け合って食べるものである。この不思議な祭は奇妙な出来事があちらこちらで起こったという噂が拡がり、それはよくないことの前兆であると解釈が下されて、お祓いのために犠牲が必要になる、という流れで行われる。貧しい暮らしが基本である共同体の人々が肉を食べることは滅多にないことで、ティムシュレットは人々の肉への欲望をたかめ一つにして行われる。ここでも奇妙な出来事の担当は女で、その解釈を下し牛を買う行動に移すのは男たちである。肉を味わいつくすことは、噂の段階から、各家庭で肉を料理する段階まで、人々がこの祭を味わいつくすこととして描かれる。慣れない肉の解体、それから分配につきまとう妙な決まり事、平等な分配のためのほとんどけん

か腰のやりとり等々、男、女、子どもがみな参加する。村のお偉方は分配にあたってそれ相応の責任があり、クレームが持ち込まれたり泣きつかれたりとは避けられない。こういった狂騒は一日で終わるが、そのうちにも密度濃い人々の交わりがあり、共同体の結束を強める役割がある。

以上の三つのシーンには、セルトーの言う「人々の会話の術」と、「お伽話が聞き手に差し出す知恵」が描かれている。いずれも、出来事は一旦想起されれば現在時制を使っていま目前で行われていることのように細部まで語られる。カビリアを外から眺めたり、学術的な研究のために観察したのでは得られない、人々が出来事を生きる様子を、フェラウンが見事に書き取っていることがわかる。

第Ⅴ章 物語の外から/へ

小説作品の読解には、その作品と別の作品との関係性が大きな鍵になることも多い。『貧者の息子』は、二部構成のそれぞれに扉にチャーホフやミシュレからの引用によるエピグラフが掲げられているほか、文中に、ヘレディア、カミュからの引用があり、【家族】の前置きにはドーデや、ディケンズ等々の名も上がっている。そのうち扉に記されたチャーホフ、ミシュレがそれぞれのどの作品から取られたものか調べ、『貧者の息子』とどんな関係があるか考えてみた。エピグラフに名前があがっている作家は、いずれも貧者の息子である、という共通点がある。

チャーホフ『ワーニャ伯父さん』は、演劇作品でその舞台が『貧者の息子』で描かれるカビリアに擬せられる。そこでは、都会の書く人と、田舎に住まつの大地に働きかけて生きる人の対照/対立が際立っている。

いっぽう、ミシュレは自伝『私の青年時代』からとられたもので、自伝ゆえにいつそう『貧者の息子』とのテキスト性格上の関連性が注目される。相違点もあるが、「私の子ども時代」と「私の青年時代」の二部構成であること、断片をならべていること、残された日記やメモから再構成されていること、語りが複数性をおびていることなど共通点が多い。『貧者の息子』はこの著作から多くの想を得ていると思われる。

物語の最後、エピローグに引用されたカミュは、フェラウンの書く人としての覚醒に大きな影響力を持った作家だが、カミュが死の時まで書き続けていた自伝的作品『最初の間』はそれまでのカミュの諸作品と異なり、マグレブの作家たちの奇妙な調子を持つ文体で書かれていた。カミュのテキストに応答するように書かれたフェラウンのテキストに、カミュの私語りのテキストは、再度応答しようとしたのだろうか。